

江古田小校長室便り 「温故創新」

H29 (2017)・1015 NO37

校長 伊波喜一

病める人 救わんとして 再生の 医療の先に iPSかな

京都大学 iPS細胞研究所の山中伸弥所長が、当初、整形外科医をしていたことはよく知られている。「父親の命を奪った肝硬変などの不治の病を治したい」ことと「外科医としての腕がなかった」ことが、臨床医から研究者へ方向転換した理由だ。万能細胞（ES細胞）は1個から何個でも作れ、全身に存在するありとあらゆる細胞を作りだせる。1998年にアメリカで人間の受精卵からES細胞が登場した。しかし、倫理上の問題から研究が止まってしまう。その時に山中氏は発想の大転換をする。それは、患者自身の皮膚や体の細胞からES細胞を作るというものだった。これならば、倫理上の問題にならず、研究を進めていける。そこから、ネズミのiPS細胞樹立、そして人間のiPS細胞樹立へと発展した。今、氏は全ての病気の治療と薬の開発を現実のものとするために、日々刻々、研究を続けている。その陰に、どれほどの努力と汗があることだろうか。成功は1%の閃きと99%の汗という。生涯、汗をかき続けられる人生こそ氏の理想であり、本望というべきかも知れない。